

## 心の栄養剤No182 「正義の先にある温かいもの」

今年も多くの流行語が生れている。「自粛警察」もその一つに挙げられるだろうか。コロナ禍の昨今、個人に委ねられているはずの自粛を他人に強制する人を指している言葉である。厄介なのは彼らは自らの正義を信じて行動しているところだ。

先月、本紙に掲載されていた藤原ひろのぶさんの記事にもあったが、正義感を持つと人は暴走する。立場を変えれば、正義は簡単に悪になり、悪もまた正義になる。

脳科学者の中野信子さんは近著『人は、なぜ他人を許せないのか？』（アスコム）の中で、「他人への攻撃的な感情を抑制するのは脳の『前頭前野』と呼ばれる部位の役割が大きい」と述べている。

ただ「前頭前野」の発達は遅く、25歳から30歳くらいでピークを迎える。それ故、「若気の至り」という言葉があるように、若い時は自分が正しいと思ったことに抑制が利かなくなることがままあるらしい。

また、**成長した「前頭前野」も加齢により萎縮してしまうそう**だ。特に人の言動に共感することが少ない人ほど萎縮するスピードも速くなっていくという。

正義感故に、例えばマスクをしていない人を感情的に叱り飛ばすご年配の「自粛警察」の人などはこれに該当するかもしれない。

電車内の携帯電話も「悪」と決めつけることができるだろうか。

突然掛かってきた電話に出て、小声で、しかも早口で話ながら急いで切ろうとしているのがうかがえる人もいる。そういう人をマナー違反だと目くじらを立てる世の中にはしたくないものだ。

先日、日本看護協会が主催する作文コンクールで看護職部門の最優秀賞を受賞した作品を読んだ。佐賀県在住の斎藤泰臣さんが経験したこんな話だった。

ある日、電車の中で夫婦と思しき男女が言い争っている声が聞こえてきた。

「電話したほうがいいよ」

「いや、人の迷惑になる。駅に着いてからでいいよ」

二人はそんなやり取りを繰り返していた。互いに感情が高ぶり、次第に声が大きくなっていった。

「意識なくても耳は聞こえるって。掛けなさいよ。お義父さん、待ってるよ」

「電車内だから掛けられないよ」

聞く気はなくとも居合わせた乗客は状況が飲み込めた。夫の父親が危篤状態にあり、今病院で息を引き取ろうとしているのだ。

緩和ケア病棟に勤務する斎藤さんにとって放っておけない場面だった。「後悔しないために電話を掛けたらいいですよ」と伝えようと席を立とうとした瞬間、その夫婦の向いに側に座っていた女性が優しく声を掛けた。

「電話したほうがいいですよ」

それを聞いた周りの乗客も次々と頷いた。みんなに背中を押され、男性は電話を掛けた。

「お袋、親父の耳元にこの電話を置いてくれ！親父、親父が一生懸命働いてくれたから、俺たちは腹いっぱい飯が食えて、少しもひもじい思いをしなかったよ。本当に、本当にありがとう・・・」

必死に嗚咽を抑え、最後の言葉を贈る男性。居合わせた乗客全員が、彼の父親にその声が届いていることを願う空気が車両内に流れていたようだ。そこに「マナー警察」のような人がいなくて本当によかった。

中野信子さんが言う「前頭前野」の萎縮を抑えて、穏やかな感情をつくる共感力は、「心の密な社会」を築くのではないかと思う。

日本講演新聞 社説より

「自粛警察」～いやなフレーズです。

実際、私の回りでも、似たような話を多く聞き～とても嫌な気分になります。

こんな時こそ、人を想いやる気持ちを持って～励まし合い、元気づけ合ってもちろん注意もし合って、皆んなで一緒に乗り切りましょう！！

『おまけ！！』



- 「恋」という字は-----下に心があるから-----下心 (シタゴコロ)
- 「愛」という字は-----真ん中に心があるから-----真心 (マゴコロ)
- 「心」を-----受け入れると書いて-----愛 (アイ)
- 「相手」の-----心を思ってこそ-----想う (オモう)

